

ことばの食感

中村 明

這えば立て

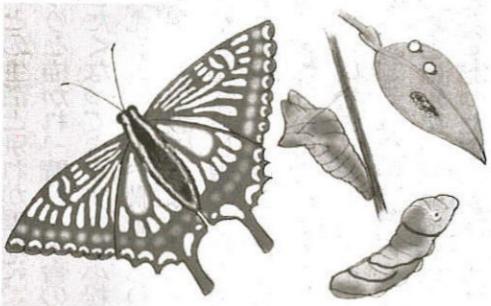
子供の成長を願う気持ちが次第に工夫され、「立てる」という三段階の動作に切り取った「這えば立て、立てば歩め、の親心」という川柳がよく知られています。このように表現を徐々に強めていくと、雰囲気が次第に盛り上がる。

井上ひさしは戯曲「小林一茶」で、「わかるかい」という疑問から、「わ

かるか」という推量、「わかるべきだ」という義務へと進み、最後に「わかれ」という命令に至る、動詞の活用じみたせり上がりを試みた。

小さな音がだんだん大きくなつて遠くまで響いてゆく様子を描いた石川淳

の小説「紫苑物語」の結びは、大きなスケールでクライマックスに導く展開だ。「かすかな声」から「声は大き



イラスト・ましま柴朋貴

かるだろう」という推量、「わかるべきだ」という義務へと進み、最後に「わかれ」という命令に至る、動詞の活用じみたせり上がりを試みた。小さな音がだんだん大きくなつて遠くまで響いてゆく様子を描いた石川淳の小説「紫苑物語」の結びは、大きなスケールでクライマックスに導く展開だ。「かすかな声」から「声は大き

(原島由美子)



1973年(昭和48年)11月15日、当時流行していたパンタロン姿の母親と、着物姿で参拝する七五三の女兒=東京・明治神宮

七五三の起源は何か。国学院大文学部の小川直之教授(民俗学)は、「平安時代後期、公家の男女3、5歳児らが初めて袴をつける儀式、着

3歳児で半数を超えて、2010年には9割超。七五三の着物は定番になった。「派手さでは、バブル期だった80年代後半が一番。商売が繁盛していたからでしょう、下町の神田明神の方が山の手の明治神宮より正絹の着物が多く、華やかでした」と清水さんは振り返る。

七五三とは別に7、9、13歳など陰陽思想で縁起が良い奇数での年齢祝いも、各地に伝わっている。昔は乳幼児の死亡率が高く、「七つ前は神のうち」と言われたため、人として認められる7歳の儀式は特に意味があり、多いようだ。夏に親の同伴なしで山上の神社に参拝する苦行をしたり、正月7日に7軒回つて七草がゆをもらったり。小川教授は「7歳は大人への助走を始める大きな区

切り。着飾るだけでなく、子に主体性をもたせて行動させることで、精神的成长も促す意味があったことを忘れないで欲しい」。

気候が穏やかな秋になり、全国各地の神社では子どもたちの愛らしい晴れ着姿が目立ってきた。日本ならではの伝統行事、七五三だ。

磯野家はどう祝ったのか。1973年11月14日、朝日新聞に掲載された漫画では七五三のワカメが、つんつるてんの着物姿に。サザエが3歳時の再利用を打ち明けると、近所のおばあちゃんは「ウチじや成人式までもたせようと本裁ちでしょ」。

本裁ちは大人用の着物として仕立てた、ということ。しかし幼児に大人と同じ振り袖なんて、無理ではないか。漫画のように袖や裾をひきずらぬよう、大人が常に持ち上げるわけにもいかないし……。

清水学園は50年以上前から、各地の神社で参拝する七五三の親子の和装・洋装率を調べてきた。73年の11月16日、朝刊には、東京版に清水学園の前身、東京服装学園の学生約50人が、明治神宮と神田明神で親子約3千人を調べたという記事があった。7歳児約400人の7割、3歳児

3歳児で半数を超えて、2010年には9割超。七五三の着物は定番になった。「派手さでは、バブル期だった80年代後半が一番。商売が繁盛していたからでしょう、下町の神田明神の方が山の手の明治神宮より正絹の着物が多く、華やかでした」と清水さんは振り返る。

七五三とは別に7、9、13歳など陰陽思想で縁起が良い奇数での年齢祝いも、各地に伝わっている。昔は乳幼児の死亡率が高く、「七つ前は神のうち」と言われたため、人として認められる7歳の儀式は特に意味があり、多いようだ。夏に親の同伴なしで山上の神社に参拝する苦行をしたり、正月7日に7軒回つて七草がゆをもらったり。小川教授は「7歳は大人への助走を始める大きな区

切り。着飾るだけでなく、子に主体性をもたせて行動させることで、精神的成长も促す意味があったことを忘れないで欲しい」。

サザエさん sozae-san をさがして

七五三



1973年11月14日朝日新聞朝刊 ©長谷川町子美術館

サザエさんのベスト版『よりぬきサザエさん』の全13巻が好評発売中です(税込み各1080円)。ご注文は書店、ASAまで。詳細は<http://publications.asahi.com/yorinuki/>へ。